

八つ橋とカキツバタ

八つ橋とは、流店のちょうど南側にある庭園を蛇行して流れる小川（曲水）の上にジグザグした形で掛けられた 8 枚の木の板から成る橋のことをいいます。八つ橋の傍には紫色や白色をした、日本の「兎耳の」アイリス（カキツバタ）が生えています。カキツバタは橋の傍の水中で成長し、5 月初旬になると花を咲かせます。

八つ橋とカキツバタの組み合わせは 10 世紀の日本文学の古典である『伊勢物語』の中に出てくる 1 つの詩がその着想の素となっています。その詩では、主人公らが 8 枚の板で出来た橋のある湿地で休みを取るために立ち止まります。その詩自体が沼地に咲いていたカキツバタを着想の素としています。その詩の 5 行は「力」、「キ」、「ツ」、「バ」、「タ」という風に、花の名の 5 つの音節から始まるようになっています。その詩はこうした言葉遊びを取り入れながらも、旅人が旅路で遠く離れた場所にいるときに感じた家族を恋しく思う気持ちを表現するものとなっています。